

平成27年度 子どもゆめ基金 体験の風リレーションシップ事業 おおすみくん家 キッズたんけんたい②

- 1 趣 旨 小学校低学年の子供たちが、親元を離れて共同生活や自然体験活動を行い、仲間と関わったり、遊んだり、協力したりする体験をとおして、自分に自信を持てるようにするとともに、体験活動の好きな子供を育てる。
- 2 期 日 平成27年7月4日(土)～5日(日) 1泊2日
- 3 対 象 者 小学校1・2年生
- 4 募集定員 40人 (申込者:170名)
- 5 参加者 44人
- 6 指導者 お話文庫P○絵夢
国立大隅青少年自然の家職員
- 7 日程と主な活動



1日目 7月4日(土)		2日目 7月5日(日)	
10:00	・受 付	6:00	・起 床
10:30	・出会いのつどい ・オリエンテーション		・荷物の整理
10:45	<チャレンジ1> 「ふれあいタイム」	7:00	・朝のつどい
12:00	・昼 食 (レストラン)	7:15	<チャレンジ4> 「カートンドッグを作ろう」 (朝 食)
13:30	<チャレンジ2> 「七夕かざりを作ろう」	9:30	<チャレンジ5> 「友だちと遊ぼう・作って遊ぼう」
18:00	・夕 食 (レストラン)		・室内スポーツ・袋ロケット作り
19:00	<チャレンジ3> 「お話の国へ行こう」(読み聞かせ)	12:00	・昼 食
20:00	・入浴	13:00	・ふりかえりタイム
21:00	・就寝準備	14:00	・別れのつどい
21:30	・就 寝	14:30	・解 散

8 事業運営について

- (1) 6月に実施をした「キッズたんけんたい①」と同様に、体験を通じた友だちとの交流活動や基本的な生活体験を位置づけてプログラムを計画した。
- (2) 今回も定員を大きく超える応募があったが、低学年児童に対する指導のほとんどが直接指導となることも考慮して、安全な活動と効果的な指導・支援ができるように、ほぼ定員数の参加者で実施をした。
- (3) 各班1名のボランティアを配置して十分な指導体制ができるように人材を確保した。また、前回は参加したボランティアが3名いたため、スタッフ間の協力・連携をより密にすることにより、円滑な運営ができるようにした。

9 事業実際

(1) ふれあいタイム

ふれあいタイムでは、初めて出会う参加者同士が、緊張をほぐしながら打ち解けられるように、「自己紹介すごろく」を行った。班付きのリーダーを中心に進めることで、コミュニケーションをとることが苦手な子供たちも、楽しみながら自己紹介をすることができた。

(2) 七夕飾りを作ろう

荒天のため予定を変更して「七夕飾り」を作って飾り付けを行った。基本的な飾りを紹介したが、これまでの経験から作り方を互いに教え合いながら楽しく制作に取り組んでいた。季節の年中行事に触れることができ、飾り付けが終わった七夕飾りを見て、みんな歓声をあげていた。

(3) 読書を楽しもう

読み聞かせのボランティアグループ「お話文庫P o 絵夢」の方々に、大型絵本や紙芝居、指遊びなどをしていただいた。それまでおしゃべりをしていた参加者も、いざ、読み聞かせが始まると、真剣な表情で話しに聞き入り、途中で歓声があがったり、笑い声が出たりしながら大いに楽しむことができた。

(4) カートンドッグを作ろう

2日目の朝食は、低学年でも簡単にできるカートンドッグ作りを行った。全体指導後にグループごとに調理をした。パンにキャベツとソーセージをはさんで、アルミ箔で包み、牛乳パックに入れて焼くという簡単な作業であるが、子供たちは一生懸命取り組んでいた。自分で作ったものをおいしそうに食べていた。

(5) 友だちと遊ぼう・作って遊ぼう

2日目の活動は、室内スポーツと袋ロケット作りを行った。室内スポーツは、トラバースとRDチャレンジと輪投げの3種目をローテーションして楽しんでいた。基本的なルールは決めていたが、グループごとに独自の楽しみ方を考えて工夫して活動する場面が見られた。袋ロケット作りは、誰でも簡単にできるということで、みんな意欲的に制作に取り組んでいた。完成後は、プレイホールで飛ばして遊んだ。思っていた以上によく飛ぶので、子供たちも喜んでいました。

10 成果

- 子供に豊かな体験をさせたいという親の願いや友だちとの共同生活や宿泊体験を楽しみたいという児童の思いが重なり、毎回定員を大きく上回る応募がある魅力的な事業となっている。前回の「キッズたんけんたい①」と同様に、今回の参加者も十分な満足感を味わうことができた。しかし、参加できなかった多くの落選者に対する体験の場の提供が課題となる。
- 参加者が小学校低学年ということもあって、より一層きめ細やかな支援が求められ、ボランティアとしての自信や力量を高めるよい学びの機会ともなっている。今後もボランティアの確保とリーダーの育成が求められる。

